

人は、必要とされてこそ 自己認識できるもの

先の記事「介護問題上の親子の互いの想いの葛藤（HP「雑学 BN」の随想等関係（Ⅷ）、2010.01.28.：参照）」で、人にとって「忘れ去られる」ということは耐え難い寂しさを感じるものであるようだと感じた。

「忘れ去られる」の対極といえる「思い出される」という次のような事象に出会い、改めて自己認識を呼び起こされるという喜びを感じた。

先日、遠くの重症児施設で療育に携わる存じ上げない方から、20年前に書いた論文内容について、まして現場を離れて8年も立つ我に問い合わせがあった。

自分も現職時代は色々な論文を参考にしたが、論文の著者に直接問い合わせるようなことはなかっただけに、この方からの問い合わせに、こうしたこともあるのだなあと正直驚くと共に、20年立っても現場で参考にしてもらえる研究に取り組んだことを、自己満足的にあえて言えば喜ばしい限り(^_^;)。

また、昨秋には、元職場スタッフの現職後輩から学会の発表原稿の相談があった。

この後輩とは8年前のリタイヤ後は殆ど交流がなかったので依頼にはビックリしたが、喜んで相談に乗った。

論文内容の問い合わせ、また、学会発表の相談といい、いずれも「思い出してくれた」ことは、何とも嬉しい限りで、改めて自己認識できるというもの。

人は、いつか思い出されて何か必要とされ、お手伝いできることが出てくることもあるということか。

そういえば、年一回だけの年賀状のやりとりであっても、年に一度は誰かが自分のことを思い出してくれた証であり、それだけに自分もみなさんを思い出して賀状すべき、と聞いたことがある。

二十数年前のある年、儀礼に過ぎない賀状はもう辞めようと思わなかったら、ある知人から「どうかしたのか？」と後日問い合わせがあり失礼した訳を話すと、「心配させるな！」とお叱りを受けたことがあり、以後毎年出している。

確かに賀状には、年一度のお互いの生存の証の意味があるかもね(^_^;)

「忘れ去られない」ように、それなりの自助努力も必要ということかな。